

ふ人であると断言する。

■とにかく泰西は勿論日本も發達しつつある、けれどもそれとは全然別個のものである、従つてその嗜好趣味も別個のものでなくてはならぬ、ましてや汪濊たるものでなくてはならぬ、目下の日本は泰西趣味の輸入で混亂してゐる。

■西洋に心酔してゐる作家は作家でよろしい、日本人が西洋人の様な仕事をしてゐると思へばそれ迄である、材料や手段やはどんなことをしてもかまわない、場合によれば油繪具の外は用ひてならないといふ法律が出ておかまはない、忠實な美術家が生れて、日本趣味の渾然たる趣味を以て時代を飾る處のものを作つてもらいたい、ビールと日本酒とコーヒーとを交ぜた様な流行はいかにもいやである。

■單に流行といふことに付てのみ言ふのではない、とてもこの混亂と摸倣の瀬戸際を脱げ出た後でなくては、大きな藝術は生れないかもしれない。

藝術小言も理窟に傾いたことばかり續いた故一時これで完結とする、稿を改めて讀者にまみえる

雲の上の山道となつた、見遙るかす連山は實に波濤の如してある、その山の中腹に四五の人家がみえる、どうしてあんな奥のく／＼高い／＼雲の中に家を構へて棲て居なくてはならぬのであらう、草山だ、大な風が吹て草が一面になびくのがみえる、重い灰色の雲が切んとしては次く、鳥一匹もなかなぬ處まで來た、もう人寰を脱して居る域に違いない、しんみりとした氣が壓ふて頭が堅くなる様に覺へる、四顧消乎として自分一人が立て居る、自分の氣が小さいのか自然の力が強いのか急にさびしくなつて來たので疲れ、足を人里ある方へと急がす。

釣橋のゆれて渡るや岸の藤

畔川生

(紀行の一節)